

THE ASAHI WEEKLY EDITION

# 週刊朝日

第二十號

第二十卷

大正十一年二月二十五日  
第三種郵便物認可

昭和二年九月十一日發行  
(通卷第三百十一號)

海女

の研究

等義峻暉 士博學醫

頃つ立秋

聲秋田徳

小品

りよ日秋

行發日曜日

錢二十部一價定



第十二卷第十二號

昭和二年九月十一日發行

表紙 秋日より

裏面 上海の極東大會、ロシヤ機岡山着、美保ヶ關沖の殉難將卒の合同葬儀、二科入選の關紫蘭女史、アメリカへ行く市松人形

鞍馬天狗餘燼……大佛次郎  
『海女の研究』……陣崎 義等  
地方色  
豆蔵の女……榎内 吉胤  
行燈の語……榎内 吉胤  
東家の巡回診療……徳田 秋聲  
秋立つ頃……榮 壽  
テニス球試合……佃 家  
高座漫談……佃 家  
モデル料一時間……幽 水  
新興プロレタリア文藝  
新刊 七千五百圓  
その概観……山内 房吉  
黒い眼鏡小説……里村 欣三  
生活に於ける難感……前田河廣一郎  
未明小川先生……松村善壽郎  
大阪洋書協會……三村伸太郎  
大衆映畫解説……三村伸太郎  
フアンの喜ぶ映畫……壽本 映亞  
唐手術の話……佐々木朝庵  
秋野菜の作り方……吉澤 良恭  
あんなに物話……長谷川浩三  
文壇噂ばなし……專門 大家  
こども相談……專門 大家  
育兒相談……專門 大家  
朝野二黨の看板くらべ……永川 俊美  
そとばくの言……永川 俊美  
辭職したセル卿……岡本 鶴松  
内外日誌……岡本 鶴松  
雑誌月評……新田 靜志  
黄金の河童話……新田 靜志  
今秋の流行……新田 靜志  
布引落語……三遊亭小圓朝  
書壇漫語……川瀬 巴水  
關基その折々……久保松勝喜代  
實戰詰將棋新題……坂田名人  
勝鬨聯珠……森 咄牛

注意 「週刊朝日」に對する問合せは必ず往復はがきの事(返信面に宛名記入の事)及び寄書等も必ず週刊朝日に宛記入されし、返稿は致しません。

# 鞍馬天狗餘燼

大佛次郎 作  
佛谷 隼 繪



## 【第六】

### 初篇 鉞り組 (六)

く内證にしないで頂かないで、こんだ迷惑な目にあふんでしてね。たゞ、まつたの心切からいふんですから。」「それアわかつてゐますよ。」「實際です。私ア決してこんなことアいひ度くないんだ。」「……………」

お照は、無言で、焦れたやうに膝を動かしながら、美しい目を使つて、話を促した。

「ほかぢやありません。姐さんの伯父さんていふのは寄場にある人足を使つて……よくないことをしてゐるのさ。鉞り組の噂を知つてゐるなら……うね?」

「三吉は、自然と鼻をひろけて唇をゆるめたが、それを凝縮めて、やに真剣な顔色になつて」「姐さん……」

「私もあんまり、いひ度くないことなんですよ。これア私の口から出たこと、これは皆村さんは勿論だか誰にも、固

前編の梗概 慶應三年の末から、薩摩の御用盗三吉と高「鉞組」が江戸の市中を騒がしてゐた。

彰義隊の一員皆村銀蔵が、その友神道無念流の名手として聞けた薩摩伊織を助けて、今日も鉞組の話をしてゐた。

が、皆村は、その鉞組をかせに、美女お照を手に入れようとしてゐるのである。

銀蔵が、船頭の三吉と大川に船を流して、謀をめぐらしてゐる時、伯の寄場に船をつけた者が二人ゐる。

一人は、夜鷹蕎麦屋の源八である。彼等は、銀蔵が鞍馬天狗の「鉞組」をかせにして、悪事をたくらむのを嘆きつけたらしい。

が、銀蔵等て、それを感ぜないわけはない。で、暗打ちをしたが……三吉がある日、お照をたづねた。

何といふ恐ろしい言葉であらう。天にも地にも掛替のない伯父、お照にはたつ一人残つてゐる血縁の人間ではなかつたらうか?

お照は、泣くに泣かれない氣持で、うつむきにして長く美しい睫毛の陰に目を宙に凝らして動かなかつた。これへ三吉はなほ寄り添つて来てそつと囁いた。

「姐さん……」

「……………」

「まつたく逃げるよりほかありません。ね、手引は私が、いくらでもしますから……木桶山さんに相談なつて……」

無言でお照は裾長く立ち上つた。長い袖に顔をうづめて、泳ぐやうな足付で、次の間へ駆け込んだのである。

不意のことだつたのできやうとしたやうに見送つた三吉も次の部屋から聞けて来る忍び音のすゝり泣きの聲を聞いて、やれ……と思つたやうににやりしたが、また急に竹の格子へ顔を押し附けるやうにして

「姐さん……」

「……………」

「……………」

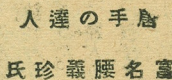
「……………」

「……………」

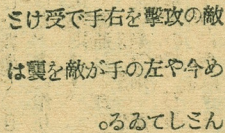
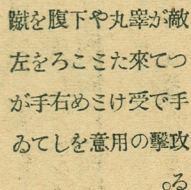
「……………」



佐々木彰磨




私は今、唐手<sup>てうて</sup>を一種の拳闘術<sup>けんとうじゆつ</sup>といつたが歐米<sup>おうべい</sup>の拳闘<sup>けんとう</sup>とは又一種<sup>いんしゆ</sup>を異にしてゐる。歐米<sup>おうべい</sup>の拳闘術<sup>けんとうじゆつ</sup>は最近我國において最も一般競技と共に盛んに勃興し來り去る六月には學生拳闘聯盟を中心にして日本拳闘協會まで組織せられたことであつた。又米國では去る七月二十一日ニニューヨークのヤンキース・スタヂアムにおいて、前の世界拳闘選手權保持者デムブシーと新進選手ジヤック・ヤキーとの間に試合が行はれることゝふ外國電報はその當時日本青年の血が湧かしたところであつた。

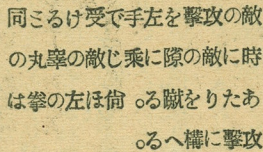


る。唐手からての型がたをやつてゐるところを見  
る。壯快さうかいの感じかんじのするもので、筋骨きんこつが

隆々り盛上り、拳で衝き足で蹴る形  
キビくして實に勇ましいものである。



ねたまゝ拳で衝いてもものゝ美事に四枚、  
共打割つた話もある。  
かういふ風だから琉球の手拳を二つ  
見舞はれたが最後死を免れないだらう  
唐手の攻撃を受けて身體の表面に傷は



妙技を發揮する人が幾らでもある。例へば坐つたまゝ躍上つて天井を蹴るこゝか、牛肉を掴み切るこゝか、青竹を握り割るこゝか、五分厚の板を五、六枚重ねて斧で打割るこゝか、梁を掴み渡るこゝか、三角飛び（これは三角形の第一頂點から第二頂點に飛び、第二頂點に足を着けず、にそのまゝ方向を變へて第三頂點まで飛び來る方法）こゝか、昔の武者修業の豪傑談にありさうな事である。

◇唐手の來歴

寫名腰義珍氏の説だと思ふ、氏の説によつて唐手は琉球國有の武器であるが琉球人が唐の國を崇拜した時代に琉球人が支那において支那武術を模古し、琉球元來の手に之を加味し比較研究の結果、その長所を探り唐の字を冠して唐手と名づけ今のやうな發達を遂げたのだらうといふのである。私もこれに賛成したい。こいふのは琉球人の喧嘩を見るに、唐手を知らない人でも殆ど習慣的に双腕なぞ持たず何れも拳で突き合ふ、子供の喧嘩を見て他府縣で見るやうな生溫いものでなく鐵拳を振舞はして組打を始める、唐手なぞ教はらない子供の癖にその衝方が唐手式だから面白い。かやうに琉球人が先天的にその素質を有つてゐる。こなさから考へてもその源泉を遠く上古に發し永い間の遺傳性で、決して近代になつてから傳はつて來たものとは考へられないのである。

◇立派な護身術

説が有力である。口碑の傳ふるところによる。約二百年前、佐久川某が支那で稽古して歸り琉球に弘めたといひ、また支那人公相君といふ人が琉球に渡

同ころけの丸臺のは拳の左

現今沖縄の中等學校では唐手を課目に加へて教へてゐるが、學校では單に唐手の型のみを教へて、實用向きのものに教へてゐない。さうして唐手なるを學校で教へるやうになつたかといふさ、これは面白い話がある。

それは、全體唐手といふものは昔々から各師匠が自分の流儀の祕密を餘り傳へず爲めに用ふ。杭の全長約七尺で距上四尺五寸、地下二尺五寸、幅三寸、厚さ上端五分、下端二寸五分、突く度に彈力ある様に出来てゐる。

敵の攻撃手に構へながら敵を指で刺殺せんこする勇姿。

まふ。某琉球出身の水兵が唐手の拳で  
鐵板を衝いて凸凹にしてしまひ將校を  
他の水兵さんを驚かせた話もあれば  
また最近東京帝大の道場で唐手の名人  
富名腰氏の門弟某が七分厚の板四枚重

敵から顔面の攻撃を受けたのを左手で受けこめ右手は攻撃の用意をしてゐる。

肉殊に胸部、下腹部、背部の筋肉の抵抗力の修練法など數ふれば違かないほどである。

かくして熟達すれば普通の人には一寸信じられないやうな人間離れのしたものである。

來して傳へたこともいはれ、また一説に  
は慶長十四年琉球が薩摩の附屬國とな  
つて一切の武器を取上けられてから、  
時代の要求が空拳の術を創造せしめた  
のではないかともいはれてゐる。

人に知らせたくないために極めて秘密  
にその弟子達に教へられてゐたのであ  
るが、明治三十四、五年のころ、肚下  
の體格検査の時、特に秀拔たる體格の  
青年についてその原因を調べたところ  
それが唐手で鍛へられたものなる事が



